

みんな『論語』が好きだった

レポート
2015

10.31
[sat]

11.1
[sun]

応神天皇の時代に日本に伝わったとされる『論語』は、日本人が初めて目にした書物でした。以来、論語は日本の古典として愛読され、書き写されたり出版されたものも数限りなくあります。古くから多くの学者が読み方に工夫を凝らし、近代でも文学者たちが論語に心酔しました。本講座では、日本人がいかに論語を愛したかに、さまざまな切り口から迫りました。また特別公演として、孔子と関わりのある「宥坐の器」復元について職人の方に振り返っていただきました。

《講演》『論語』のさまざまな読み方と解釈

日本において行われてきた『論語』の訓読の流れをたどるとともに、注釈書『論語集解』（古注）と『論語集注』（新注）についてご紹介。両者の間にどのような解釈の違いがあるかも解説されました。

講師：影山 輝國

(実践女子大学 文学部国文学科 教授)



す。朱子学の祖・朱熹（1130～1200年）の注釈が『論語集注』（新注）で、江戸初期の学者・林羅山はこれを用いて論語に訓点をつけました。その後も新注に基づき、後藤芝山や伊藤仁斎、佐藤一斎といった学者たちがそれぞれ工夫を凝らして訓点をつけました。

論語の訓読にはさまざまなバリエーションが見られますが、それは注釈に用いるのが古注か新注か、新注でもどの学者が訓点をつけたものか、によって生じたものです。



▲近年、『論語』が大人気。本講座でも多くの方が聴講されました。

■多種多様な読み方が生まれた背景

多くの日本人がまだ文字というものを知らない3世紀末に、百済から到来した王仁が『論語』をもたらしました。当時の日本人は、論語を中国語の音で読んで意味を探ったのではないかと推測されます。では、いつ頃から、「学ぶときに之を習う」といった風に訓読をするようになったのでしょうか。明確にはわからないのですが、平安時代に明経博士を務めていた清原氏と中原氏が訓読をしていたことが確認されています。両氏は、魏の何晏（190～249年）が編纂した『論語集解』（古注）を論語の解釈に用いていました。

江戸時代になると中国から朱子学がもたらされ、学問の主流となりま

■古注と新注の違いを考察する

古注と新注にはどのような違いがあるのでしょうか。例えば三省章といわれる「曾子曰、吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、与朋友交而不信乎、伝不習乎。」の最後の4字（伝不習乎）について、古注では「自分でもおさらいしていないことを人に教えていないだろうか」と解釈し、「習わざるを伝えんか」と読んでいます。一方、新注では、「先生から教えられたことをおさらいもしないでいるのか」と解釈し、「伝えて習わざるか」と読んでいます。このように、古注と新注の間には、各文の解釈などにさまざまな違いが見られます。解釈が異なれば読み方も変わってきます。

《講演》『論語』のテキストについて

『論語』について日本語ではどのようなテキストが生まれ、読まれてきたのかをたどりました。また、室町時代に盛んに行われた写本（古写本）について触れ、それらが何をもとにしたものなのかを考察しました。

講師：高橋 智

(慶応大学付属研究所 斯道文庫 教授)



れるようになります。新注はとて分りやすく、難解な古注や、それに基づく古写本は顧みられなくなりました。そうした風潮の中で登場したのが安井息軒で、彼は新注と古注を統合した注釈書を創出しようと尽力します。そして生まれたのが『漢文大系』で、これが以降の論語テキストの基盤となっていきました。

■3つの系統に分類される古写本

論語の写本は、室町時代のものが100点近く現存しています。これを分類すると3系統に大別されます。1つ目は博士家のテキストを写したものです。清原氏の関係者などから出たと推測されます。次は正平版論語と呼ばれるもので、1300年くらいに日本で初めて出版された論語がルーツになっています。これは印刷技術を持っていた寺院から出たのではないかと考えられます。最後は『論語義疏』（梁の皇侃（488～545年）による、古注をよりわかりやすくした注釈書）を写したもので、日本最古の学校・足利学校から出たものだと思います。

中世ではこのように3つの系統で論語の写本がつくれ、多くのの人に読まれました。これだけ多くの写本が残っているのは論語だけです。論語がいかに日本文化の中で大きな位置を占めているかおわかりいただけると思います。



▲画像も用いながら、わかりやすい講義が行われました。

■日本では、論語のテキストがどのようにつくられたか

3世紀末に百済から『論語』が渡ってきた後、7～8世紀に中国から印刷技術がもたらされます。この技術は主に寺院で使用されていきました。中世になると、清原氏や中原氏が論語の写本をつくりました。

室町時代になると清原氏・中原氏に代わり、寺院が学問面で台頭していきます。そこには中国から多くの書物が輸入されて蓄えられていました。そこで学んだ僧たちがつくった写本は、日本各地に散らばっていました。学問の普及により権威を保つことが難しくなった清原氏・中原氏が、その頃、朝鮮から伝わった活字印刷の技術を活用して出版したのが「古活字本」です。これは博士家に伝わる論語のテキストに訓点を入れたものでした。

江戸時代に入ると朱子学が勢力を得て、論語の注釈にも新注が用いら

《講演》近代文学者の孔子像 —武者小路実篤を中心に—

武者小路実篤の『論語私感』を取り上げ、彼の『論語』の読み方と孔子像について、他の近代文学者と比較しながら見つめました。また、論語私感を通じて私たちがどのように論語を読み、何を学び取ればいいのかを考えました。



講師：瀧田 浩
(二松学舎大学 教授)

■「孔子は聖人ではなく、論語は絶対的真理の書ではない」

近代日本という西洋の学問を取り入れることが盛んだったイメージがありますが、意外にも『論語』は多くの文学者に愛好され続けていました。今回は、白樺派の作家、武者小路実篤を中心に、近代日本文学と論語についてお話したいと思います。

実篤が論語に関わるのは1924年に新しき村を出た後、40代の中年期に差し掛かった時期でした。彼は論語の研究に打ち込み、1933年に『論語私感』を発表しました。「孔子の言葉には実に同感する。論語を通して人間について考え、そのうちから今の我らの生命の糧になるものを取り出したい」という意の文章を前書きに記しています。この著書の中で実篤は、孔子を偉人として扱っていません。それにより、「孔子を聖人として、論語を絶対的真理の書としてとらえなくても、良く生きるためのヒントが得られるのではないか」ということを提示しているのではないかと思います。

■『論語私感』は、孔子の思想をわかりやすく説いた人生論

さまざまな近代文学者や文学作品と、実篤とを比較してみましょう。宮沢賢治は非常に研ぎ澄まされた理想を抱いた人で、「世界全体が幸



▲人気のドラマなども取り上げながら親しみやすいお話が展開されました。

福にならないうちは個人が幸福になることはない」と言っています。一方実篤は、「世界全体が幸福でなくても個人が幸福になっていい」という考えを持っていました。実篤の価値観は東洋的で、論語とも近いものがあったのではないかと考えられます。

文学では、孔子が登場する作品として代表的なものに谷崎潤一郎の『麒麟』、中島敦の『弟子』があります。これらを実篤の『論語私感』と比較してみます。谷崎の作品では、悪に敗れる善を描いており、善を象徴する存在として孔子が登場します。中島の作品では、弟子の悲劇に打ちひしがれる孔子が描かれます。どちらも孔子は単なるモチーフであり、その思想自体を主題としてはいません。実篤の『論語私感』は論語を主題とした素朴な人生論で、芸術的ではないけれど、孔子の思想がわかりやすいという特徴を持っています。

現代において、現実と理想をいかに融合させるかが重要な課題になっています。曖昧さを許容する論語、またそれをかみ砕いた実篤の『論語私感』は、今改めて評価されるべき存在ではないかと考えます。

《特別講演》「宥坐の器」製作秘話

「宥坐の器」は、孔子が「中が空の時は傾き、水を入れると真っ直ぐになり、いっぱいになるとひっくり返る」と弟子たちに伝えた器です。苦勞の末、この器を復元した針生さんに製作秘話を披露していただきました。



講師：針生 清司
(工芸家、労働大臣表彰受賞〔卓越技能〔現代の名工〕])

■「宥坐の器」の謎を解明するまで

私は親の代からの板金職人です。父親は徴兵されて海軍工廠（軍需工場）で鍛金技術を叩き込まれたようです。私も職人を志し、一生懸命技術を覚えました。勤め先からの独立準備をしていた時、知人の経営者から「ただがむしゃらに働くだけではそう簡単に幸せにはならない。まず、人間の生き方やもの見方、考え方を学びなさい」と諭され、ある財団法人が開いていた講座で論語などを学ぶことになりました。

そこで「宥坐の器」の存在を知ります。世の中にこんなすごいものがあるのか、と衝撃を受けながらも、自分の鍛金技術ならつくり出せるかもしれない、とも思いました。

その時目にしたものはレプリカでしたが、後年、それが宥坐の器として機能しないという噂を耳にしました。そこで、それでは自分がつくってみようと挑戦したのですが、器を留める金具の位置が決められない。器の体積計算をしなければならぬのですが、その方法がわかりませんでした。後に計算方法を知り、勇んで宥坐の器を製作したのですが、幾つつくっても機能しない。100個以上つくったものの、やがて諦めてしまいました。ところがある時、ふとしたきっかけで器が重すぎて水との

バランスが取れなかったのではないかと思います。それで今度は薄い材料でつくってみたところ、ようやく「宥坐の器」が出来上がりました。ここに至るまでに13年かかりました。

■宥坐の器の構造と、新たなカタチ

宥坐の器は対照形に見えるのですが、実は片側が厚く、反対側が薄くなっています。そしてバランスの良い位置に金具を配することで、水を入れると宥坐の器として機能するようになっています。

これまでに250点以上つくり、足利学校（栃木県）や湯島聖堂（東京都）、中国やオーストラリアなどに寄贈しました。また、発展形として、水を入れると反対側に覆るものや、水を入れ続けなければ正しくはならないものなども製作しました。前者には「人間は高慢になると転倒する」、後者には「常に学ばないと真っ直ぐではいけない」といった考えを込めています。



▲画面に映っているのが復元された「宥坐の器」。実物展示も行われました。